

むなしくしてへりくだり、人間の生活を受け入れ、人々のうちに苦しむキリストのからだに触れるのです(24番)この6年間近く、確かにわたしたちは出向いて行くことの意味や喜びを、忍耐の必要性も学びながら、体験してきました。御父に倣ういつくしみを表す一つとして、その道もさらに進んで行きましょう。

教皇様は教会が直面している危機についても指摘しています。「洗礼を受けている者の一部が教会への帰属を実感していないのは、小教区や共同体の中に人を

受け入れない雰囲気や構造が存在することや、人間の生活に大なり小なり生じる問題に対する官僚的態度にあることも認めなければなりません。多くの点で、司牧よりも管理が重要視されています。同様に、福音宣教への取り組みなしに秘跡が執行されているのです(63番)仙台教区にもこのような現実があることは否めません。そこにも御父に倣ういつくしみを表し、少しずつでも皆で乗り越えていきたいものです。御父に倣ういつくしみに直結し、しようと思えば誰にでもできる

簡単なこと、「笑顔と挨拶を交わし合うこと」からかなと、思うのですがいかがでしょうか。

新しい年が与えられたことをまず御父のいつくしみと受けとめながら、あらためてごあいさつを申し上げ、年頭の祝福をお送り致します。仙台教区の皆さまと、教区内で展開されている教会の諸事業の上に神からの豊かな祝福が注がれますように。

2017年1月1日

仙台教区長司教

マルチノ 平賀 徹夫

「司祭不在のときの主日の集会祭儀」

司教 平賀 徹夫



仙台教区の「地区制度」は、2014年4月に導入され、3年たちました。教区を8地区に分け、各地区に複数の司祭が派遣されました。地区制の基本的な考えは、司祭各人は地区内の全小教区を担当し、司祭つながりで(とでも言うか)、信徒も自分の所属する小教区だけでなく「地区内の全教会が私たちの教会だ」と考えるように、というのがありました。また、毎主日には地区内のできるだけ多くの小教区でミサが行われるように、司祭はローテーションで一日2~3教会を巡回することが考えられました。ですから司祭間の、同時に、地区内教会の信徒間の話し合い・連携・協力が欠かせない大事なことで、今まで心掛けてきたところです。

ところで、地区制導入時には直接地区に係わる司祭の数が34人でしたが、それが2016年12月現在は27人と、ほかに月に一度、東京から出向いてくださる修道司祭が一人という状態です。それに皆さん3歳年を取りまして、距離をものともせず運転してできるだけ多くの教会を巡回することの継続が危ぶまれる声も起こってきました。また、ミサ後急いで次の教会へ回るのでなく、信徒との関わりのために共にいる時間をとる必要性が強く感じられるようにもなりました。一つの教会に留まる時間を多くとるということは、主日にミサが必ずあるという教会が今までよりも少なくなる、ということです。

私たち信者の信仰の養いにとって、「主の日」の一つに集まって神を礼拝すること、つまり、主キリストの死と復活を記念する「感謝の祭儀」を行うことと、聖書・神のみことばが最も大切であることは変わることはありません。しかし上記のように、主日に小教区でのミサが行われない場合が増える可能性があり、それへの対応として、「司祭不在のときの主日の集会祭儀」を準備する必要があるということです。地区制導入以前にもこの研修がおこなわれたことがありましたが、あらためて、地区ごとに、このテーマでの「教区研修会」を今年度中に行う、ということが「宣教司牧評議会」定例会で論議され決定されました。

狩浦 正義神父

名古屋教区へ



2012年5月から、名古屋教区から

残りの人 生を福島のために

捧げる決心をして自ら志願され福島第1原発に一番近い原町教会に、故・梅津明生神父に続き、常駐司祭として着任されました。

原町教会では、実に故・エ

ベール神父以来10数年ぶりの常駐司祭が復活し、夜も司祭館に明かりが灯り続けるようになったことを喜んでいました。

原発被害で様々な困難を抱える中、この地でミサをささげ、信徒たちを励まし、被災者の方々に寄り添い、福音を証ししてくださいました。

司教日程

1月・2月

- 1・1 ⑩ 神の母聖マリア
- 5 ⑥ カリタス金石理事會
- 10 ④ 司祭評役・教区司祭団 役員
- 12 ⑥ 部落差別人権委・事務局會議
- 20 ④ 人権を考える委員会
- 21 ⑤ 宣教司牧評 役員會
- 30 ④ 教区司祭団 月例會
- 31 ④ あけの星會
- 2 ② ④ 学校法人理事會
- 6 ⑤ ⑨ ユスト高山右近列福式巡礼
- 13 ④ 部落差別人権委員会定例会
- 17 ④ 仙台教区サポーター會議
- 20 ④ 司教總會
- 27 ④ 地区別司祭の集い

この度、ご自身の健康の事情もあつて、急ぎよ昨年11月27日、名古屋教区にお帰りになりました。本当にありがとうございました。神父様の御健康の回復をお祈りいたします。今後4月末まで、原町教会は、東京大司教区補佐司教である、幸田和生司教が協力してくださいます。

【クリスマス飾り】

八木山教会



桜の聖母学院高等学校

地区だより

第2地区
合同黙想会
八戸塩町教会・鮫町教会

11月27日(日) 待降節
第1主日に、八戸塩町教会・鮫町教会合同の待降節黙想会が行われました。講師は現在司祭の家をいらつしやる横島健二神父です。横島神父は、2014年の12月まで塩町

教会にいらつしやったのですが、突然の怪我で引退することになり、送別会を開く間もなくお別れになっていました。

2年ぶりにお会いした神父様は、少し痩せたようではありませんでしたが、話しぶりはパワフルで、お元気な姿に信徒一同安心しました。講話の内容は明快で、「同じ新約聖書でも著者が違えばまったく違うことを言っている。だからそれぞれに聖書を読んで自分自身の考えをもちなさい。教会や神父の言うことに従ってはいけません」と、2年前とまったく変わらない、歯に衣着せぬ「横健節」を發揮してくださいました。

今年には横島神父様の叙階50年目にあたっていただきましたので、講話の後には神父様の金祝を祝うパーティーを開きました。この日のために、二家族の子どもたちが、特別なお祝いのカードを用意してくれました。八戸にいらつしやった時には、子どもたちを特にかわいがってくださり、ミサのあとには



お祝いをもらって喜ぶ横島神父

アイスキャンディーなどをしよつちゅうごちそうしてくださった神父様です。久しぶりに神父様にお会いできた子どもたちも、そして一回りも一回りも大きくなった子どもたちにも会えた神父様も、とても嬉しそうでした。横島神父様、50年間ありがとうございました。これからも、無理をしない程度にご活躍ください。そして教会の子どもたちが大きくなるのを見守ってってください。

(八戸塩町教会 福島 由香子)

待降節黙想会

東仙台教会(第5地区)

12月4日(日)、待降節第二主日、東仙台教会ではイグナシオ・マルチネス神父(グアダルーペ宣教会、カトリック中央協議会社会福音化推進部部長)を講師に、待降節黙想会を行いました。東仙台教会は、イグナシオ神父が司祭に叙階され、最初に着任した思い

出の地。暖かな再会ムードに包まれたひとときとなった。

待降節とは

「待降節」は、受け身で、何もしないでただ「待てばいい」という期間ではない。それぞれの生活の中で、積極的に準備をして待たなければならぬ。自分にとってイエスを迎える妨げは何か、生活の中で、どのようにキリストを示していけばよいか。自分を見つめ直し、悔い改める期間、それがまさに待降節。

ルカ福音書といつくしみ

「大聖年は終わったが神のいつくしみは終わらない」と教皇様は言った。そしてルカ福音書は「いつくしみ



の福音書」と呼ばれていて、いつくしみを特に強調している。今日はルカ福音書の二つのたとえ話「善きサマリヤ人」と「放蕩息子」とのたとえ話から学んでみたい。このたとえ話は、どちらもイエスを試そうとしているフアリサイ派や律法学者たちに向けて話されている。

善きサマリヤ人

律法学者はイエスに「わたしの隣人とは誰ですか」と言った。イエスはた

「ラウダート・シ」共に暮らす家を大切に

私たちが共に暮らすこの地球には2016年現在、73億人もの人々が住んでいる。多くの動植物がその生命を生きている。

世の初めに神が、この世界を創造された時、それはすべて良しとされ、人間は非常に良いものとして創造された。神がすべて良いものとして創造されたこの世界は今、どうなっているのだろうか。

この「共に暮らす地球」に何が起きているのだろうか。私たちはすでに、多くの環境破壊から気候システムの温暖化を体験し、原子力発電所の存在がひとたび災害が起こればどうなるか知っている。環境と自然保護への関心が深まる一方、消費主義にあおられて自己中心的なライフスタイルを変えることができなくなっていることも事実である。

教皇フランシスコは、回勅「ラウダート・シ」の中で、多くの示唆を与えているがとりわけ「エコロジカルな回心」を呼びかけている。私たちはこの回勅からキリスト者としていかに生きるべきかを再認識したい。

地球を大事にする会 (小川敦子 osu)

とえ話の後に「誰が襲われた人の隣人になったと思うか」と尋ねた。この二つの態度は全く違う。サマリヤ人は襲われた人を見て「隣れに思った」。これは隣人となる喜びにつながる。自分から進んでその人の所に行く、「助けをあげる」ではなく「隣人にならせてください」という思いが大切。

放蕩息子のたとえ話

放蕩息子は、父が生きているうちから財産を分けてもらった。これは父が死んでもいい、父の命より財産が大切であるというとてもない態度(ちなみに、この時、兄も財産を分け与えられているのだから、実は、兄の態度も弟と大差はない)。しかも、息子が家に帰ろうと思ったのは、父の愛を求めてではなく、食べ物が欲しかったから。「お父さんごめんさい」が先ではない。しかし、父にとって謝罪はどうで

もいい。謝ったから赦すのではなく、一方的に受け入れる。私たちに求められているのは「どうせ自分は放蕩息子だ、その兄だ」ではなく、「父になるためにできることは何か」と考えること。それは、社会に向けて神の愛を分かち合うことでもある。

まとめ

2つのたとえ話に共通するのは「隣れに思う」こと。これは私たちがもやろうと思えばできる。神はできることしか求めない。でも、何ができるか、何ができないかを決めることができるのは自分だけ。自分を責めるのではなく、自分にできることは何かを考えて生活することが大切。神は、毎日その機会を与えてくださる。そのため私たちが、ミサに集まって信仰と希望と喜びを確認し、そこから派遣されて生きていく。

(東仙台教会 赤井 悠蔵)

「平和のための脱核部会」in青森集会 — 「原発 いらない」

カトリック正義と平和協議会主催の「平和のための脱核部会」in青森大会は、10月15・16日の2日間、六ヶ所村から大間原発の現地見学会と講演会が行われた。

初日の現地見学会は参加者31名。核燃サイクル阻止1万人訴訟団原告の浅石紘爾代表と、事務局長

山田清彦氏の案内で、9時に八戸駅を出発し、車窓よりむつ市の中間貯蔵施設、10時には六ヶ所PR館見学、午後2時ごろ大間原発建設地「あさこはうす」で、(お母さんの熊谷あさこさんの意志を継いだ娘の)小笠原厚子さんと懇談、大間原発全容見学、そして八戸に戻り、午後7時30分より交流会。16日(日)は、午前10時30分から平賀司教司式のミサ、説教はイェズス会光延一郎神父。「今こそ原発の廃止を」の本が発行された経緯、前日の六ヶ所から大間までの現地学習に触れられ、



大変突っ込んだ内容だった。午後1時から、元京都大学原子炉実験所勤務 今中哲二氏の講演。「なぜ放射性物質から放射線がでるのか、原発の核分裂、核融合の



講演する今中氏

仕組、核燃料サイクルの基本的な知識について説明があった。「どんなことが起こっても安全な原発の国策がいかにウサンくさいか、原発事故の危険度と核燃サイクル事業未操業、使用済廃棄物(高レベル、低レベル)の保管の行きづまり等、危険と課題が山積みのまま、国策として原発再起動と新しい型の原発(大間)の建設、貧しい国々へのプラント輸出が行われていることへの危惧が、専門家の立場から話された。講演会への参加者は、約100名。

正平協スタディーツアーに参加して
Sr 中村 敬子 O.S.U.
待降節第1主日を迎えました。
救い主の到来を待ち望む季節、恥

ずかしながら今年の待降節ほど救い主の到来を切に、切に、求めたことがありません。寒さが増すにつれて、大間の「あさこはうす」が脳裏から離れないのです。目覚めさせられたと言わねばでしょうか、神様の呼びかけでしょうか。

福音宣教と言う名目を掲げ、目の前の仕事に没頭していた昨々までの自分を振り返ると、降誕節を迎える準備の指導はそれなりに心を込めたつもりでした。弱い立場の人々の苦しみ、難民の問題、テロの恐怖、貧しい人々や、被災地の課題等々、授業で扱い、生徒たちと話し合いながら、自分なりにそれらに向き合ってきたつもりでした。しかし今、本当に、真剣に、心の底から「救い主の到来」を信じて、祈り求めているかという思いにかられています。

10月15日、「正義と平和協議会」の原発勉強会に参加させていただきました。福島原発事故以



大間原発フェンスの前で

前から、東海村臨界事故や地元六ヶ所の問題は大変気になる問題として、PR館にも何度か足を運び、生徒の保護者からも情報を聴くなどして、自分なりに勉強し情報も収集していましたが、具体的な行動には至らなかつたのが正直なところでした。

今回のスタディーツアーの衝撃は何と言っても「あさこはうす」でした。計り知れない巨大な悪に向かつて、体を張って一人真実を

「あさこはうす」

津軽海峡に面する青森県・下北半島の北端で、建設中の大間原子力発電所の炉心からわずか300mにある唯一の民家が「あさこはうす」(青森県下北郡大間町)。過去には地権者が「あさこはうす」を含めた建設予定地の買収を拒んだことで、大間原発は建設地を移動せざる得なくなったこともある。母の代から30年、様々な嫌がらせをうけながらも用地買収に応じなかつたのは、「自然を壊したくない、失いたくない」という反原発、地球環境問題への思いからだ。



叫ぶ、こんな現実があるだろうか。現実とは思えない何か錯覚、幻影のように冷めた瞬間を感じていました。しかし、帰路、そして今、あの過酷な現実が脳裏から離れないのはなぜでしょう。大間の寒さはいかばかりか、予想がつかず。津軽海峡の強風雪、船のない港、大間の町に似合わない社宅、巨大な建屋のテント、フェンスで囲まれた巨大な檻、その檻の中に「あさこはうす」があります。「あさこはうす」の住民小笠原さんはどうしているだろうか。国策に翻弄される貧しい大間の人々には？ 主よ、来てください。主よ、来てくださいと「救い主の到来」を切に、切に待ち望む祈りの日々です。

イルミネーションとクリスマス飾り — 関教会



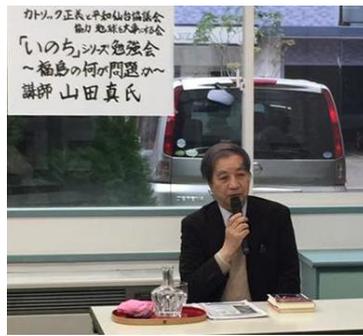
「原発 いらない」 —ほんとうのことは知らされない—

第2回「いのち」シリーズ勉強会

「福島の問題か」

講師 山田 真氏 (八王子中央診療所所長)

11月27日(日)、正義と平和仙台協議会主催による、勉強会が元寺小路教会1階ホールで開かれ、およそ40名が参加した。



講師の山田真氏の写真は、2011年6月以降「放射能から子どもたちを守る全国小児科医ネットワーク」代表として、福島をはじめ各地で原発事故被災者の健康相談にあたっている。

東京で福島から避難している子どもたちの検診をしているが、時間の経過とともに相談に来る人も少なくなってきた。

そこで、30年にわたって放射能を監視し、福島での暮らしを回復するため学びの場を提供し、放射能の測定や、交流会、放射線防御の知識普及を目指すセミナーやワークショップ開催を目指して「NPO法人ふ

くしま30年プロジェクト」を立ち上げた。

福島からの自主避難者には、国からの支援がない。避難した地域では、子どもの「いじめ」もあり、福島からの避難者であることを知られないようにするなど、精神的なストレスを抱えている人が多い。

「5年も経ったのだから福島は心配ない」という風潮のもと、避難者の帰還を強要している。

放射線量を測定しているが、出るだけ線量の低そうなるを測定したり、測定する前に役所の職員がその場所を除染してから測定する。数か所の測定値の平均値を発表するなど行政の言う線量をそのまま信用することはできない。

測定器は、地上1.5mの所に設置されているのが多いが、地表の近くで測定するとけっこう高い値が出ることもある。



東京でも、仙台でも、線量の高いスポットがある。1ミリシーベルトなら安全だという根拠は全くない。原子力産業のつごうの良いデータだけが発表されて、あとはブラック・ボックスになっている。

アメリカやソ連の原爆実験、チェリノブイリの原発事故で、放射能が地球規模に広がっている。日本では、これに加えて広島・長崎の原爆と福島原発の放射能がある。

山本太郎議員が、国会質問で、福島・青森・長崎の小学生4千人の被ばく量を測定した結果、福島より長崎の方が多かったという結果だったと述べている。

ベラルーシの保育園では、20年後の今でも線量を測定している。日本では、福島以外のところ

で線量の測定をしていない。「ふくしまを忘れない」「放射能を忘れない」ためには、こまめに線量を測ることが必要だ。

国と福島県と東京電力の都合の良いように「データ」が操作され、国策として原発の再稼働が進められていることに不安を感じる。

マスコミも国策に反する報道を控える傾向にある。いつの間にか「ほんとうのことは知らされない」日本になってしまった。

南相馬市の現状

CTVCカリタス原町ベース

畠中千秋 (聖心会)

東電福島第一原発から25kmに位置していることから、南相馬市原町区と小高区の住民の皆様は被災者であり、原発事故により、一度ならず数回、避難所を転々とした経験を持ち、家族や親戚を震災(津波・地震等)で亡くされています。

被災者への支援活動も原発事故による放射能の問題があり、被災直後すぐに現地に入らず、カリタスベースの中でもカリタス原町ベースが一番遅く、2012年6月に開設されました。

東日本大震災発生から5年9か月が過ぎた現在も仮設住宅や借り上げ住宅に暮らしている方々が多くおられます。少しずつ、災害公営住宅に引っ越しが始まっています。南相馬市南側に隣接する浪江町の方々のための災害公営住宅は、原町区のうちこちらに建設中です。中通り、会津に避難していた方々の中には、気候が浪江と同じなので暮らしやすい浜通りの仮設住宅に引っ越しされる方々もあります。

小高区内の小学生、中学生、高校生は原町区や鹿島区に設置された仮設校舎で勉強を続けています。この5年間、公立の保育園・幼稚園は休園、私立の保育園・幼稚園のみ震

災前の定員に満ちていなくても、若い世代への応援として続けていきます。

南相馬市では放射能の問題のため、若い世代が避難した後、帰還していない状況があり、仕事はあるが、若い世代の人手不足が大きな課題です。

復旧復興には時間がかかっています。除染作業も予定より大幅に遅れています。回収した汚染物質の入ったフレコンバッグ(黒袋)が高く積み上げられ、シートで覆われ、塀で囲まれています。仮の仮置き場が海沿いや山間のあちこちに増えてきています。仮置き場の近くに実家のある方が、この状況の中に「帰還良し」とするのだろうかと思いを吐き出されるのを耳にしました。

原町ベースは、原町教会に隣接する地に移転新築し、2016年12月17日、落成式を行いました。「カリタス南相馬」と名称を改め、息の長い活動を目指します。



新築された「カリタス南相馬」
南相馬市原町区橋本町1-15
TEL0244-26-7718
FAX0244-26-8007

仙台教区「新しい創造」…第4期の取り組み

被災地支援活動情報交換会 仙台地区8教会

仙台地区8教会の東日本大震災被災者支援活動関係者による情報交換会が11月26日(土)教区センター会議室で開催されました。この会は、被災された方々の仮設住宅から復興公営住宅への転居が始まり、各教会のお茶つこサロンなどの支援活動が終わり近づき、今後の取り組みを模索してい

た昨年4月、8教会による情報交換の場として始まり、今回が5回目となりました。「新しい創造基本計画第4期計画」では、「仙台教区の小教区が互いに協力し合って長期にわたって持続的な活動を」と強く呼びかけています。これを受けて、10月の集まりでは、今後私たちにできることについて意見交換を行いました。その結果、①各小教区にはまだまだ活動しなければと思っている人がいるが、高齢化もあって小教区単位での活動はきついため、この会としてまとまりをもって活動してい



石巻ベースを訪問

く、②仙台地区の復興公営住宅に移られた方々の支援については今後も情報を集めながら検討していく、③宮城県内にある「カリタス石巻ベース」を支援する、④原町ベースをはじめ福島県内の教会による支援活動とつながりをもつことなどで皆の意見が一致しました。

今年で11回目となる、「春風の家」恒例の「一足お先にクリスマス&点灯式」を12月3日(土)に開催しました。東仙台教会をお借りしてのイベントは講演会とコンサートで構成。今年、東北大学加齢医学研究所の研究員の方から「認知症」をテーマにお話頂きました。お集まりの方々には皆さんお年頃(?)とあつて熱心に耳を傾けていらつしやいました。講演後の、脳の活性化に役立つお手玉や新聞紙を使った簡単な遊びも会場の皆さんは楽しめました。

第2部では、アマチュアの弦楽合奏団「ゲッツゲロズリステン」による愉快なコンサート。昇を存分に楽しみ会場をスperlマン病院に移していよいよ点灯式です。夕闇が迫るころ、ラトゥール神父に祝別していただいたイルミネーションが点灯されると、参加者から大きな歓声が上がり、暗かった広場が一面の光の庭になりました。このイルミネーションが、教会やお顔を存じ上げない大勢の方々のご寄付によって灯され続けていることを考える時、改めてクリスマスが希望と感謝の時であることを思わずにはいられません。

一足お先にクリスマス&イルミネーション点灯式

今年で11回目となる、「春風の家」恒例の「一足お先にクリスマス&点灯式」を12月3日(土)に開催しました。東仙台教会をお借りしてのイベントは講演会とコンサートの二部構成。今年、東北大学加齢医学研究所の研究員の方から「認知症」をテーマにお話頂きました。お集まりの方々には皆さんお年頃(?)とあつて熱心に耳を傾けていらつしやいました。講演後の、脳の活性化に役立つお手玉や新聞紙を使った簡単な遊びも会場の皆さんは楽しめました。

ハンセン病問題と仙台教区 人権を考える委員会

永遠のいのちを

イグナチオ滝田十和男
それから(小見さんが亡くなってから)二年程して、大橋さんと同じ部屋に住むようになってからその時の事が話に出て、「カトリックでは臨終を迎えた病人の床には必ず司祭が来て、終油の秘跡を授けてくれる。」と云うことを知った。それであの小見さんの安らかな死顔の謎が解けたような気がし、それでこそ本当の宗教と云えるものではないかと、カトリックに対する関心を持つようになった。

それから間もなく要理の勉強に入り、他の二人と共に小野神父様から洗礼を授けて頂いた私は、此の三十年余の間に語り尽くせない程のお恵みを

受けつつ、何の為す処もなく教会の中をうろろうして時を過ごし来たと云う感じがして、恥入るばかりではあるけれども、今まで信仰の苦業を共にしてきた兄弟達のうち、幾人もの人々が此の世を去るに当って示した英雄的な信仰の証しは、私達に更に神への希望と信頼を促がして余りあるものであった。

或る婦人は、つよい自閉症に苦しむ他人とは一切口を利こうとはしない人であったが、自から信仰を求めて来て洗礼を受けなくなった。又、片時も口ガリオを掌から放そうとしなかったM老人の82才の死。二十余年間も結核病棟の個室で孤独な日々を耐え、人々に信仰を示し続けたマリアA。盲目の身体で倒れる日まで聖堂に通い続けることを何よりも喜びとしたSさん

等々。私の記憶の中に、つねに新しく蘇えってくる臨終の顔がある。これ等の人々は、全て仏教からの改宗者であり、然かも成年を過ぎてから福音の光に触れた人達ばかりではあるけれども、洗礼によって神の子に加えられたことを喜びとし、病気の苦しみを神に捧げることの意味をよく弁え、祈りを生活の全てにして生きた証人と云うことができよう。

そのためには、如何に多くの神父様方が尊い無償の愛を傾けて働いて下さったことか。思えば、ただただ頭を垂れて感謝の思いを深くするばかりである。

人間的にも強い絆で結ばれた此姿の司祭と信者の関係は、此の世に於ける神と人間の関係を象徴的な姿として捉えることが出来るし、日常の信仰生活を導くことばかりでなく、病人の塗油の秘跡

を授ける司祭の手は、神からのもので、すべての罪を赦して完全な安心を与えてくださることを知るのである。このように、深く大きな神の愛を分け与えてくれるカトリック教会の中に、身を置くことの出来た私達は、祈りの家である聖堂を構えていたいただければなりなく、60名の小さな群ながら、互いが助け支え合う共同体の恩恵にも浴することができた。

永遠に滅びることのない生命を信じることによつて、うつくしい臨終が与えられたM老人やマリアAのように、また、あの小見さんのような死が叶えられるとしたら信者として此れ以上の倅せはない。それを、私達の第一の願望としたい。思うことしきりな此の頃である。

原文のまま(完)
教区人権を考える委員会 御供 真人



イルミネーションは、1月13日までの夕方4時半から10時まで、点灯しています。(春風の家 小野敬子)

第39回聖霊による刷新東北大会

「神のいつくしみを永久に歌おう」

11月18日から20日まで、まだまだ紅葉が美しい杜の都仙台「茂庭荘」にて本大会は開催されました。講師は渋谷教会の堀江亀子さんでした。

大会の初めにラトゥール神父は、いつくしみの特別聖年はもうすぐ終わりになりますが、神のいつくしみが終わりになるのではありません。むしろここから始まるのです、と挨拶されました。

堀江さんは講話の最初に、主からのメッセージを伝えたいと言われました。



東北大会に参加した方々（中央 ラトゥール神父）

「この東北大会で、何を伝えたらよいでしょうか」と主に伺った時に、主は「あなた方は光の子であるということに気づいてほしい。イエス・キリストの死と復活を通して、洗礼によって闇の世界から救いだされて光の子とされた意識してほしい」と。

講話は、イエス様に一目ぼれをして洗礼を受けられた事から始まり、いい信者になりたかった事。ご主人の転勤で最初はニューヨーク、二度目にロサンゼルスに行かれ、そこで祈りの集い（聖霊刷新）との出会いがあり、聖霊の満たしをいただいていたから喜びが湧いてきて、悩みが無くなったわけではないけれど喜びが続いていた。

日本に帰って来た時、渋谷にも祈りの集いが出来ていてびっくり、4人の司祭たちがもう聖霊に燃えていた。

異言の祈りについては、最初はその価値も必要性も分からなく、特別欲しいとも思わなかったが執り成しのために異言の祈りが必要になって願った。祈りの中で異言の祈りは宝であり、それは自分を建て、予言や癒しや大きな賜物を引き出す祈りとなるのでぜひ願ってほしいと説明されました。

三度目の海外はカナダのカルガリーで、そこにも祈りの集いがあり、セミナーや黙想会にたくさん出て楽しかった。そして「毎日の黙想」を出版している「THE WORD AMONG US」に出会った。それを読み続けて祈っていくうちに、これは神様からの贈物だと確信し、この本を日本語に翻訳し多くの人に喜ばれた。これを雑誌の形で出したいと長年願っていた。ある時、聖母の騎士社の神父様に電話をし、このような書物を月刊誌のように出版したいと話すと「堀江さんいいですよ」と予想もしていなかった返事が返ってきた。

神父様は「毎日の黙想」のことも堀江さんのこともご存知なかったのです。神父様は、最近では世俗的な印刷物ばかりで、このままでは聖母の騎士社は終わりだ、霊的な月刊誌のようなものを出版したい、何とかしてほしいと熱心に祈っていました。

たところだと言われました。堀江さんも敬愛していたコルベ神父様を通して「毎日の黙想」と聖母の騎士社がつながり、双方の祈りが聞き届けられた瞬間でした。2日目の午後、平賀司教の司式によるミサでした。説教の中で「何年ぶりかこの集まりに参加させていただきました。明日、ローマのサンピエトロ大聖堂の聖年の扉が閉じられて、「いつくしみの特別聖年」は閉幕となります。この一年間、私たちはどのように神様のいつくしみを味わってきたでしょうか。神はいつくしみの神、ゆるしに富む神、私たちの弱さをことごとくゆるしてくださり、私たちが神の命に気づかざるもの、神の子として喜んで迎え入れてくださる神、それが神様のいつくしみです。



イエス様にもっと近づいていきたい、私たちの自己中心的な考えを取り払い、心を広げイエスさまの思いに近づいて行きたいと願うことが神様のいつくしみに近づいていくことになるでしょう。聖霊来てくださいますと祈り、ここまで導いていただいたことに感謝しながらこれからも復活の命に導いてくださいと願います。」と話されました。

最後の日、聖霊の満たしを祈っていただきました。

ラトゥール神父はカズラを着て会場に入ってくださいました。神父様はひとり一人に按手し、とても丁寧に分かりやすい言葉で魂を込めて聖霊の満たしを祈ってください、堀江さんは後ろから賜物があたえられるようにと祈ってくださいました。会場は部屋いっぱい聖霊が満ちあふれて、主のいつくしみが充満していると感じました。私は満たしの祈りが始まってから最後まで涙が止まりませんでした。そして最後に、全員で神父様を囲み神父様のために祈りました。神父様をはじめ皆の顔は喜びで輝いていました。プログラムの最後は派遣のミサで、大きな喜びと主のいつくしみの中であずかることができました。

参加者は昨年と同じくらいでしたが、初めて参加された方が5〜6人おられたので、とてもうれしく大きな希望をいただいたと感じています。いつくしみと恵みに満ちあふれた神様を賛美し、そして感謝いたします。

（秋田・土崎教会 保坂慶子）



西仙台教会馬小屋飾り

【告知板】
日本カトリック女性団体連盟
第43回仙台総会
開催日 5月16日（火）〜18日（木）
場所 元寺小路教会
テーマ 「絆」神の愛を共に生きる

第4回仙台ロゴス講座

《シエナの聖カタリナ》

仙台ロゴス講座では、ドミニコ会創立800年を記念し、「ドミニコ会の偉人たち」をシリーズで行っています。

2016年11月19日(土)、北仙台教会信徒館で行われた今回の講座は、無学な庶民の娘がイタリアの保護者、「教会博士」、ヨーロッパの保護者になった《シエナの聖カタリナ》とおとめ教会博士を取り上げました。講師はSr眞壁恵子OP(聖ドミニ



シエナの聖カタリナ

コ宣教修道女会)で、突然の講師依頼にも関わらずドミニカンファミリーだからと、快く引き受けてくださり、ドミニコ会の代表的な女性神秘家を、かいつまんで分かりやすく話されました。

- ① 聖カタリナの生涯について、
 - ② 聖カタリナの橋の霊性『対話』(『対話』)
 - ③ 聖カタリナのおもな活動
 - ④ 聖カタリナの橋の霊性を生きる者として……
 - ⑤ まとめ、をパワーポイントと講話を交えての話でした。
- 聖カタリナは、134年、イタリア

アのシエナで染物職人であった父親の家庭に生まれました。両親は、娘が早く結婚することを望んでいました。

6歳のころドミニコ教会の尖塔上に現れたキリストの幻視を見ました。

16歳で両親の反対を押し切り、ドミニコ会の第三会へ入会しました。

聖カタリナが生まれた14世紀は、ペストの流行、教会内の分裂、教皇のアヴィニヨン捕囚等で世の中は混乱していました。このような時代に聖カタリナは、20歳まで祈りとペスト病者の看病等々愛徳の業に励みました。

23歳の時再び現れたキリストとの対話が、聖カタリナ固有の使徒活動の基となりました。それは、『対話』と『手紙』によるもので、ほとんど教育を受けていない聖カタリナの手紙や著書は、当時教会と国家のあいだの困難な問題、ドミニコ会の改革のために貢献しました。

28歳で聖痕を受けました。キリストから宝石の冠と茨の冠とを差し出され、キリストの前にひざまずき、茨の冠を選んだというエピソードも有名です。そのためカタリナの図像は茨の冠を被った姿が多く描かれています。

1377年(30歳)、教皇はフランスのアヴィニオンからローマへ帰還されました。教皇のアヴィニオン捕囚が終わり、聖カタリナは大きな使命を果たしました。



1380年4月29日に33歳の生涯を閉じました。

聖カタリナは、橋は離れているものをつなぐ、橋を通るとき人はその橋を踏むという表現をしています。それは御父から派遣されたキリストが二つの岸天上の彼岸と地上の彼岸をつなぐ橋。(資料より一部抜粋)『観想し観想の成果を他に伝える』が標語のドミニコ会の第3会員として生きた観想家、神秘家でした。1461年、ピオ2世により列聖されました。祝日は、4月29日。

Sr佐々木登茂子(ドミニコ会)



光ヶ丘スペルマン病院のイルミネーション

新刊紹介



ゲームで学ぶ子どものせいしよ
ぶん レイア・ジェンセン&イザベッ
レ・ガオ/イラスト ホセ・ペレス・
モンテロー/発行 サンパウロ/定
価 1800円+税

本書のタイトルに「子どものせいしよ」とあるように、旧約聖書と新約聖書の部に分かれています。旧約聖書は、天地創造から始まり、預言者ヨナで終わっています。ついで新約聖書では、天使のお告げで始まり、イエスの誕生、12使徒の選び、放蕩息子のたとえ話、カナの奇跡、中風の人を治すイエス、嵐をしずめるイエス、パンを

与えるイエス、ご受難、十字架、復活など、ご生涯のおもな場面が描かれています。引き続き、パウロの回心などが描かれ、最後は、キリストを待ち望んでいるところで終わっています。

小学校低学年生向きの本ですが、楽しみながら聖書が読めるように、いろいろなゲームで遊び、ページをめくって行けるように、工夫がこらしてあります。塗り絵、線で結んでいく遊び、絵を完成させる遊び、迷路、違いを見つけるもの、同じ絵を見つけさせるものなど、豊かにあります。

イラストの絵にも、遊びの部分がたくさんあり、子どもたちの関心をひくことでしよう。

ぜひ、教会学校、またご家庭でもご利用ください。

編集後記

「すべてこの世のことには時がある(コヘレト3:1)。物事を始めるのに時があり、止めるのに時があるということを教えてください。」

時のしるしを敏感に感じ、それに応じた行動をとることが求められている。教皇フランシスコの回勅「ラウダート・シ」は、「共に暮らす家を大切に」と呼びかけている。地球の危機は、人間の飽くなき欲望が元凶で、もう何十年も前から時のしるしがあった。

にもかかわらず、各国の歩調がまちまちで有効な手立てが採られていない。海水温の上昇による気象変動で、やがて人間がこの地球に住むことが困難になるのではないかと心配だ。

私も「時のしるし」、「歳としるし」を感じている。今号をもって教区広報の仕事を手掛けた。号、号外2回と、計88号分を手掛けた。その間、振り返ると苦痛とか困難だと感じたことはなかった。時間に追われたり、原稿が遅れたりして焦ったことはあっても、最終的にはつじつまが合って完成する。これは、聖霊が働いてくださったという以外説明がつかない。神に感謝!!

これまで、支えてくださった編集委員、原稿や写真を送ってくださった方々、そして、愛読して下さった皆様に感謝!! 今後の教区報をもぜひ支えてください。(岩井)